

桂小五郎が駆け抜け
志賀直哉や与謝野晶子が散策し
芸妓さんの三味線が響いた路地

裏路地探険

大谿川のせせらぎ木屋町通り／城崎町

城崎温泉は、古くから狭い谷間に開けた山陰の名湯。町の中心を大谿川が流れ、柳並木や太鼓橋、三階建ての旅館が建ち並び独特の町並みをつくり出している。その中であって、木屋町通りは、賑やかな温泉街から少し入った大谿川沿いの静かな小径、さまざまに人々が行き交った面影を彷彿とさせながら歩く。

木屋町通りの変遷は、残されている史料の古地図から、江戸後期までは家が数軒ほどしかなく、その他は田畑で、家が多く建ちはじめたのは明治になってからと考えられている。しかし、大正14年の北但大震災でほとんどが崩壊。復興にあたって、京都木屋町の美しい川沿いの風情をモデルに、河川・道路の整備が進められた。あわせて芸妓の館、置屋も木屋町に集められ、昭和30年代には

たものや朱色の欄干とさまざまな生活の空間として花鉢も並べられている。橋を渡って対岸を見渡すと少し視線も変わる。山の緑が意外に近く、狭い谷間の温泉地であることを実感する。

また、桜並木も四季それぞれに風情を加える。春の桜は特に見事、夏は心地良い木陰をつくり出し、秋は落ち葉がゆつたりと川面を流れ、冬は雪景色、小枝からばらばらと雪が落ちる様もおもしろい。

木屋町通りを整備し、保存していくと、大谿川沿いの住民で木屋町振興会も発足している。向井去来や野口雨情の歌碑の設置、花を植え、縁台を設け、ギャラリーや万灯などのイベントも展開している。

さらに、少し足を延ばせば高僧・沢庵が再興した古刹、極楽寺へ。外湯めぐりに、お土産物屋や遊技場が並ぶ通りを歩くのも楽しいが、ちよつと路地に入り込む寄り道もおすすめだ。

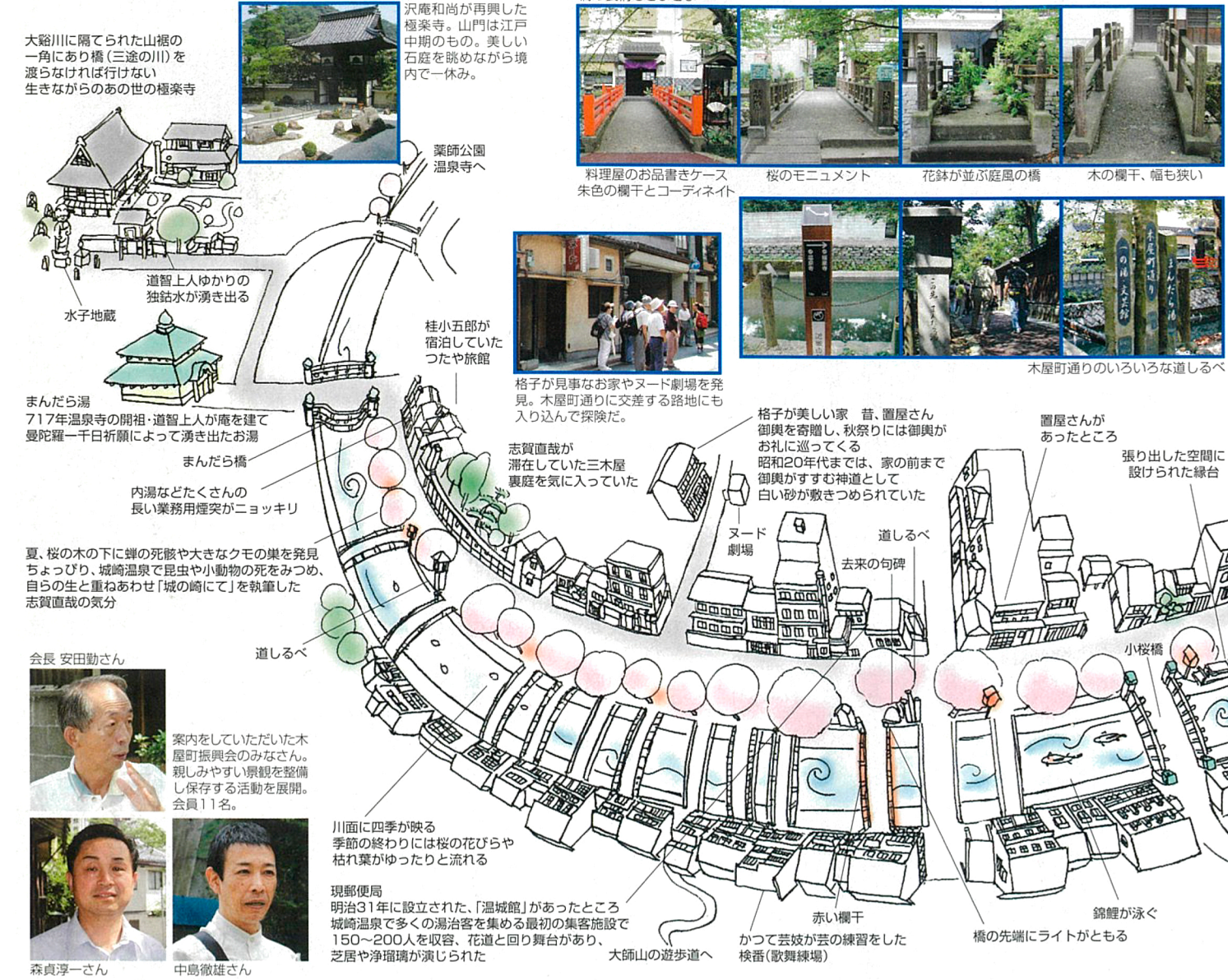
協力：城崎町・木屋町振興会

●裏路地探険隊員募集
12月1日(土)但東町探険
京街道宿場町の面影を残す久畑地区を歩く
*実施日の10日前までに、18ページ掲載のT2編集部へ住所・氏名・年齢・電話番号・裏路地参加希望とお書きの上、ハガキでお申し込みください。開催は午前中、現地集合(現地解散)となります。申込締切日、案内を参加ご希望の方へ送付致します。

木屋町通り(城崎町)
一の湯の前にかかる王橋からまんだら橋までの約500メートルの小径。大正14年の北但大震災後、京都木屋町をモデルに復興・整備が進められた。約80本の桜並木に、19本の橋がかかり、風情ある川緑の景観をつくり出している。道幅が狭く車両は一方通行。



橋を渡ると景色も変わって見える。



城崎にあった置屋9軒の内6軒が、さらに、芸妓が芸の練習をする検番(歌舞練場)もあり、三味線の音色が路地に響き、80人の芸妓がいたと言われている。お座敷に浮かせることを「芸妓さんがお花に出られる」と言い、お正月には紋付き裾引きの装いで、ひいき筋の旅館などへ新年のあいさつに回る艶

やかな姿が湯の町、木屋町界隈に繰りひろげられた。しかし、昭和60年代には置屋も減ってしまい、現在はなくなり使われなくなった検番の建物だけが残されている。

志賀直哉が滞在していたのは、震災前の大正2年、山の手線の電車にはねられ重傷を負い、三木屋で養生していた。裏庭が木屋町通りに面し、さらに、幕末維新の頃、尊攘派の志士、桂小五郎が京都から逃げのび宿泊していた、つたや旅館も隣接している。

現在の木屋町通りは、一の湯の前にかかる「王橋」からまんだら湯の「まんだら橋」まで約500メートルの距離に、19本の橋がかかり、約80本の桜並木が続く。橋は木、石、コンクリート、鉄の素材を使っ

